国際ロータリー　第2570地区　新座ロータリークラブ会報　2025～2026年度

NIIZA　Rotary　weekly

第1909号

令和8年4月2日　発行

国際ロータリー会長　フランチェスコ・アレッツォ　～良いことのために手を取り合おう～

第2570地区ガバナー　相原　茂吉『クラブ強化と活性化のために行動してください』

会長方針　森　克巳　『楽しく奉仕！　未来に繋ぐ ロータリーの輪』

UNITE FOR GOOD

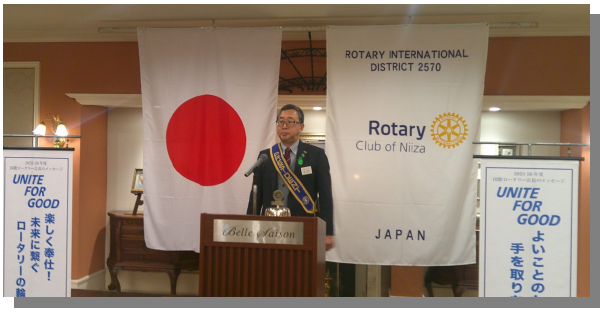
会長　森　克巳　　副会長　鈴木　明子　　幹事　松岡　昌宏

第2300回例会　3月第4週　3月26日（木）

通常例会　『ミニ卓話』高橋遼太会員・高沢幹久会員

司　　会	親睦活動委員会	石原　勇介
点　　鐘	会長	森　　克巳
ソ ン グ	「我らの生業」	

会長の時間　　会長　森　克巳



皆さんこんにちは。本日も例会にご出席いただき誠にありがとうございます。早いもので、３月も残すところあとわずかとなりました。

桜も咲き始め、春の訪れを感じる季節となりましたが、風はまだ冷たく、まさに季節の変わり目といったところです。どうか皆様におかれましては体調管理には十分ご留意頂ければと思います。

さて、先日の３月１２日のガバナー公式訪問におきましては、大変多くの会員の皆様にご出席いただき誠にありがとうございました。お陰様で、例年以上に活気のある、大変有意義な例会となりました。改めて、心より御礼申し上げます。

特に印象的でしたのが、入会５年未満の会員の皆様とガバナーとの懇談会です。

今回は６名もの新会員の方々にご参加いただき、会としての広がりや、次の世代へのつながりを強く感じる機会となりました。

私自身の話で恐縮ですが、入会して間もない頃初めてガバナー公式訪問に参加したときのことを思い出しました。当時は、ガバナー公式訪問の意味もよく分からず「とにかくすごい方が来るらしい」という程度の認識でした。懇談会に参加しても、緊張ばかりが先に立ち、何を話したのか、正直ほとんど覚えておりません。…ただ一つだけ覚えているのは「早く終わらないかな」と思っていたことくらいでして（笑）。今振り返ると、ずいぶん失礼な話ではあるのですが、それくらい余裕がなかった、ということだと思います。ただ、不思議なもので、そのときに感じた“場の空気”や“ロータリーという組織の奥行き”のようなものは、今でもしっかりと記憶に残っています。そして後になってから、「あの時間には意味があったのだな」と実感するようになりました。

ロータリーは、入ってすぐにすべてが分かる組織ではありません。むしろ、こうした一つひとつの経験の積み重ねの中で、少しずつ理解が深まり楽しさや意義が見えてくるものだと思います。

そう考えますと、今回ご参加いただいた新会員の皆様にとっても、この懇談の時間が、これからの

ロータリーライフの中で、じわじわと意味を持ってくる、そんな機会になったのではないかと感じております。そして私たち既存会員にとっても、初心を思い出す、大変貴重な時間になったのではないでしょうか。

さて、本日の卓話は、今年度の新たな試みとしてスタートいたしました「会員ミニ卓話」の第２回目となります。この企画は、会員同士がお互いをより深く知ること、そしてクラブの一体感を高めていくことを目的としております。

本日は、高橋遼太会員、高沢幹久会員のお二人にお話しいただきます。普段の例会ではなかなか聞くことのできないお話が伺えることと思い、私自身も大変楽しみにしております。こうした時間の積み重ねが、「このクラブにいてよかった」と感じられる場づくりにつながっていくのではないでしょうか。本日もそのような実りある時間になることを期待しております。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

幹事報告　幹事　松岡　昌宏

１、地区事務所より２件受信

１）ロータリー親睦活動グループバイク日本支部(IFMR日本支部)第２回ジャパン大会青森五所川原開催の案内

日時：7月18･19日(土･日)10時～15時30分

場所：青森五所川原　＊参加希望者は事務局へ

２）２０２５年度版手続要覧　印刷出版の案内

１、「新座福祉フェスティバル」合同例会参加事業

日時：5月31日(日)点鐘:10時～15時

場所：新座市役所駐車場

１、令和８年春の全国交通安全運動の実施要項

実施期間：4月8日(月)～4月15日(水)

出発式：4月8日(月)10時　カインズ　新座店

１、志木ロータリークラブより４月度例会案内

１、埼玉県緑化推進協議会より緑の募金協力依頼

スマイル報告　親睦委員　土屋　俊弘

森　　克巳会員　髙橋遼太会員、髙沢幹久会員、本日の卓話、楽しみにしております。

松岡　昌宏会員　髙橋会員、髙沢会員、ミニ卓話よろしくお願いします。

岡本比呂志会員　髙橋さん、髙沢さん、ミニ卓話楽しみにしています。

髙橋　遼太会員　つたない卓話ですが、よろしくお願いします。

岡野　元昭会員・宮川　勝平会員･増渕　和夫会員
並木　　傑　会員・龍山　利道会員･髙沢　幹久会員
石原　勇介会員・吉原　礼子会員･村上　俊之会員
山腰　拓実会員・土屋　俊弘会員･古賀　　毅　会員

『髙橋遼太会員、髙沢幹久会員、本日の卓話楽しみにしております』

ミニ卓話

髙沢　幹久

皆さま、こんにちは。本日はこのような貴重なお時間をいただき、誠にありがとうございます。

本日は「不動産売買を通じて見える、人と地域のつながり」というテーマで、少しお話しさせていただきます。

不動産売買というと、多くの方は「土地や建物を売る・買う」というシンプルな経済活動を思い浮かべるのではないでしょうか。しかし、実際にこの仕事に携わっておりますと、それは単なるモノの売買ではなく「人の人生そのものに深く関わる仕事」であると日々実感しております。

例えば、ご自宅の売却を検討される方の背景にはさまざまな人生の節目があります。お子様が独立されてご夫婦二人の生活になったケース、相続によって実家を引き継いだものの活用に悩まれているケース、あるいはご高齢になり、より生活しやすい住まいへ住み替えをされるケースなど、本当に様々です。
あるお客様は「この家には３０年住んでいて、子どもたちの成長がすべて詰まっているんです」とおっしゃっていました。リビングの柱には身長を刻んだ跡が残り、庭には家族で植えた木が大きく育っていました。そのようなお話を伺うと、その家は単なる不動産ではなく「ご家族の歴史そのもの」であると感じます。その一方で、その家を購入される方にとっては、新しい人生のスタート地点です。初めてマイホームを購入される若いご夫婦、小さなお子様を連れて新生活に胸を膨らませているご家族など、それぞれが未来への期待を抱えています。つまり、不動産売買とは「誰かの思い出が詰まった場所が、次の誰かの未来になる」という、時間をつなぐ役割を持っているのではないかと思います。私はこれを、よく“人生のバトンリレー”のようなものだと感じています。ここで重要になってくるのが「地域の価値」という視点です。不動産の価値は、立地や広さ、築年数といった目に見える条件だけで決まるわけではありません。もちろん、それらは重要な要素ですが、実際の現場ではそれ以上に「その街にどんな人が住んでいるのか」「どんな雰囲気なのか」といった、目に見えない価値が大きく影響します。例えば、同じような条件の物件であっても「この地域は子育てがしやすそう」「ご近所の方が親切そう」「安心して暮らせそう」といった印象があるだけで購入を決断される方は少なくありません。逆に、条件としては申し分のない物件であっても「なんとなく合わない」と感じて見送られることもあります。この“なんとなく”の正体こそが、地域の持つ雰囲気であり、そこに暮らす人々の姿なのだと思います。つまり、地域の価値というのは、そこに住む私たち一人ひとりの行動や関わりによって形成されているということです。
日々のあいさつや、地域活動への参加、困っている方へのちょっとした気配り。そうした積み重ねが、その街の魅力となり、不動産の価値にもつながっていきます。

ここで、ロータリークラブの皆さまの活動に目を向けてみたいと思います。
皆さまは日頃から、地域社会への奉仕活動に取り組まれております。清掃活動や防災活動、青少年の育成支援、地域イベントへの参加など、その内容は多岐にわたります。これらの活動は、直接的に利益を生むものではありませんが、確実に地域の魅力を高めています。
そしてその魅力こそが「この街に住みたい」「ここで暮らしたい」と思う人を増やし、結果として不動産の価値にも良い影響を与えているのではないでしょうか。そう考えると、ロータリーの活動と不動産の世界は、実は非常に深いところでつながっていると感じます。
また、不動産売買において欠かせないもう一つの要素が「信頼」です。不動産は高額な取引であり多くの方にとって一生に一度、あるいは数回しか経験しない大きな意思決定です。そのため、お客様は常に不安を抱えていらっしゃいます。
「この価格は適正なのか」「将来的に価値は維持されるのか」「本当にこの選択で良いのか」―こうした不安に対して、私たちは専門家として誠実に向き合う必要があります。ここで思い出されるのが、ロータリーの「四つのテスト」です。
「それは真実かどうか」「みんなに公平か」「好意と友情を深めるか」「みんなのためになるかどうか」。この考え方は、不動産の現場においても非常に重要な指針となります。例えば、物件のメリットだけでなく、デメリットも正直にお伝えすること。短期的な利益ではなく、お客様の長期的な幸せを考えること。取引に関わるすべての方にとって、納得感のある結果を目指すこと。こうした姿勢を大切にすることで、信頼関係が築かれ、その信頼が次のご縁へとつながっていきます。
最後に、これからの不動産と地域について少しお話しさせていただきます。現在、日本では少子高齢化や人口減少の影響により、空き家の増加や地域コミュニティの希薄化といった課題が顕在化しています。かつては「不動産は持っているだけで価値が上がる」と言われた時代もありましたがこれからは「どう活用するか」「どう地域と共存していくか」が問われる時代になっています。例えば、空き家を地域の交流スペースとして活用したり、若い世代の移住を促進する取り組みを行ったりと、不動産の可能性は広がっています。その

中で重要なのは「人と人とのつながり」です。どれだけ立派な建物があっても、そこに温かいコミュニティがなければ、本当の意味での価値は生まれません。不動産売買は、単なる取引ではなく「人と地域の未来をつくる仕事」です。一つひとつのご縁を大切にしながら、地域に根ざし、人と人とをつなぐ役割を果たしていきたいと考えております。そして本日お集まりの皆さまとも、それぞれの立場で地域の価値を高めていく仲間として今後も何かしらご一緒できる機会があれば大変嬉しく思います。

髙橋　遼太

ＡＩ時代における士業の役割と
ロータリーの「四つのテスト」

本日は、「AI時代における士業のあり方」というテーマでお話しさせていただきます。私は司法書士をしておりますが、経営者の皆様も日頃から様々な士業の専門家と関わる機会が多いことと思います。現在、AIの技術は日々凄まじいスピードで進化しており、私たちはまさに「産業革命」に匹敵するような歴史的な変革のただ中に生きていると感じています。実際にAIを実務に活用してみると、驚くほど便利なことがわかります。先日、私が契約書を作成した際のことです。これまでなら職員に指示を出して、修正を含めると完成までに２週間ほどかかっていた作業でした。しかし、AI（ジェミニやNotebookLMなど）に条件を入力して作成を指示したところ、わずか1分でラフ案が出力されました。そこから自分の要望に合わせて微調整を繰り返しても、20～30分でほぼ完璧なものが出来上がったのです。それを弁護士の先生に確認してもらったところ、わずか5分で「大丈夫です」とのお墨付きをもらいました。本来なら２週間かかっていた仕事が、AIの力で30分で完結してしまったのです。

では、これによって「士業の仕事はAIに奪われてなくなるのか」というと、私はそうは思いません。確かに、これまで行っていた「作業」の大部分はAIでできてしまいます。しかし、我々のような人の財産を扱う仕事は、1ミリの間違いも許されない厳しい世界です。デザインなどのクリエイティブな仕事には明確な「正解」がありませんが、士業の仕事には厳密な正しさが求められます。AIが99.9%正しい答えを出せたとしても、現状の法律では「AI法人」のようなものが存在しないため、AIが問題を起こした際に責任を取ってくれません。つまり、AIが作成したものに対して「これが間違いなく正しい」という最終的なお墨付きを与え、全責任を負うのは、これからも私たち「人」なのです。これは他の分野でも同様です。私の趣味であるスノーボードでも、動画のURLを読み込ませるだけでAIが解説スライドを作ってくれますが、その理論が正しいかどうかは、やはりプロのインストラクターの確認が不可欠です。プログラミングのコード生成にしても、最終的にその妥当性をジャッジして使いこなすには、人間の基礎教養や知見が必要になります。
このようにAIが普及する社会において、我々ロータリークラブが掲げる「四つのテスト」の考え方がより一層重要になってくると感じています。
「真実かどうか」という事実ベースの確認であれば、AIでも高い精度で弾き出すことができるでしょう。しかし、それが「公平か」「みんなのためになるか」「好意と友情を深めるか」といった、明確な答えのない感情的な問題や倫理的な判断は、人間にしかできません。インターネットやAIの発達により、様々なコミュニティが生まれ、人々の価値観も多様化しています。このような変化の激しい時代に柔軟に対応していくためにも、ロータリーの「四つのテスト」のような不変の倫理指針を常に胸に抱きながら、日々の判断を下していくべきだと最近強く感じております。

最後になりますが、私はいつもアドリブで話すため「原稿がない」と皆様にご迷惑をおかけしておりました。しかし本日は、音声を自動で録音・要約してくれるAIツールを使用しております。事務所に戻ればすぐにこの卓話の原稿が出来上がりますので、今回は催促されなくても無事に提出できるかと思います。